



涼しさは あたらし昼

あおすだれ
青簾

妻子の留守に ひとり見る月

江戸時代の狂歌師、唐衣からころも橘洲きつしゅうが夏の涼を詠んだ一首です。打ち水で涼をとりながら、縁側に寝転がって月を見ているのではと想像しています。

そして、風鈴の音とともに涼しい風がスーと吹き抜けているようでもあります。庭の打ち水も新しい昼の匂いも、そして簾すだれも、今は懐かしい思い出として残っています。「妻の留守に一人見る月」、この時季、妻や子を里に送り出したお父さんが、ひそかに味わう愉うれしみでもあったのでしょうか。

晝、簾、青い月、この歌には涼しさを醸す夏の夜の雰圍気が伝わってきます。誰に気兼ねすることなく、団扇うちあわを片手に縁側のゴザでうたた寝をしていた父を思い出しています。

さて、夏祭り（六月灯）の季節になりました。地域の祭りには、さまざまな由来や起源があり、目に見えない力への畏敬の念が、多くの祭りの本体になっています。

春には豊作を祈り、夏には

疫病退散を願い、秋には収穫への感謝の気持ちを含めて、祭りは大切に伝承されてきました。

東北の七夕祭りやねぶた祭など、祭りの名から直ちにその風景を思い浮かべることができる地域には、豊かな夏の表情があります。

過疎や少子高齢化などの社会の変化などのために、祭り（六月灯）の開催そのものが、厳しい状況に置かれていても、それをね返す地域力を備えた故郷は輝いています。地域との関わりが少ない暮らしは、気楽な半面孤独で味気ないものになりがちです。祭りは極めて複雑な準備作業を必要としますが、孤立した人と人を出会わせ、共同作業を促す契機になります。こうした意味からも、現代人と現代社会において、切実に祭りを必要としているのではないのでしょうか。地域を内側から輝かせる力が祭りにはあります。

最近縁側文化を失った住まいが主流になりました。

「縁側と風鈴の音と祭り」には、生活のにおいや色、人の情など、日本人としての生きざまが凝縮されています。

「僕のこと 親よりくわしい 店のひと」。あれこれと、近所の子どものたちの世話を焼く近所の店のおじさんやおばさんがいました。幼かった頃の近所の情景が目につくたび、年月が流れても温かい気持ちになります。このような風景は今や珍しくなりましたが、子どもの声と夏祭り、近所のおじさんやおばさんが声を掛ける小さな店は、我々の世代にとって心の原風景です。〈男は祭りを そうさ かいで生きてきた〉

こぶしを利かせて北島三郎さんが歌い上げています。祭りとともに日本の夏がやっつきます。



指宿市長
豊留悦男